

『白蛇傳』的解讀補遺（一）

鈴木陽一

提要

本論文對白蛇傳的三個問題進行考證。

第一，考證『白蛇傳』開篇林昇的詩，在警世通言刊行的那年代，讀者怎樣理解而欣賞。一千六百二十年代，東北成立了「後金」王朝，開始向明朝的領土進攻，東北已經開始打戰。這樣的情況下，林昇的詩可能使讀者想起南宋過了分斷國家時期最後被元朝滅亡的歷史來。同時考證利用林昇的詩句給一所餐館起來的「樓外樓」的這個名字戰前有什麼內涵。

第二，先介紹金華將軍廟的主神是吳越國的曹杲，考證敘述者為什麼把除了杭州人以外都不熟悉的地方神放在故事開頭。同時，指出這樣的敘述的來源可能是淘真等杭州地方曲藝的文本。

第三，敘述者利用白娘子住的地方「雙茶坊巷」就是後洋街，而且一名叫做竹竿巷，捕吏去那所鬧鬼住宅抓白娘子時，房子前面故意放著竹竿，使杭州的讀者理解這所凶宅在哪兒。這種方法就是弄虛讀者的招數，本人認為『白蛇傳』的特點就是使用不少有關杭州地方文化的招數。

『白蛇傳』の解読補遺（一）

鈴木陽一

キーワード：『白蛇傳』 林昇 樓外樓 金華將軍 竹竿巷

はじめに

日高先生のお伴をして杭州から紹興へ、そして普陀山にまで足を伸ばし、江南の春を楽しんだのは天安門事件の翌年一九九〇年の春三月のことである。本来この旅行は全くの観光を目的としたものであったが、当時学科設立のため本学に赴任された尾上兼英先生の手配りがあり、また一行四人の中に学部長、副学長を務められた岡野哲士先生、人文研所長、国際交流センター長を勤められた高野繁男先生がおられたため、思いもかけず、本学と杭州大学（後に浙江大学に合併された）との学術交流の、ひいては人社系の国際交流がようやく動き出す第一歩ともなった。この経過は、本学の国際交流の歴史の重要な一頁であり、その後の展開の中で日高先生が重要な役割を果たすこととなったこと、さらに筆者が一貫して杭州西湖を研究対象としてきたこととも関わり、ここに簡潔に記しておくことにする。

一行四名を乗せた列車が杭州駅に到着したその時、交流が始まった。当時杭州大学日本語科助教授兼日本文化研究所所長、現浙江工商大学東亜研究院院長王勇氏が筆者の名前を書いたプラカードを手にしてホームで待た

れていたのである。この後ホテルで今後の交流について話し合った後、翌日は王勇氏の手配により、筆者のみ中文系の先生方との拙い中国語による学術座談会に参加し、日高先生を含む三方は日語系の先生と流暢な日本語を駆使する優秀な女学生たちの案内で、西湖の春を満喫された。また、この日であったと思うが、杭州大学の当時の学長沈善洪氏と夕食をともにし、沈学長の学識と飾らない人柄、王勇氏と同僚の王宝平氏の交流実現への情熱に一同深く感じるところがあり、杭州大学との交流を一気に進めようということで意見が一致した。

帰国後は、人文研所長の高野先生と委員であった日高先生が人文研を動かし、また尾上先生、小島晋治先生、更には筆者を含めた中国語学科がこれに続き、丹羽常務理事の支持を受けて交流実現へと大きく動き出し、最終的には全学学術交流協定調印に至った。しかもこの協定のもとで、毎年シンポジウムを開催すること、開催場所は日本と中国とで隔年とすること、シンポジウムでの報告は杭州大学で刊行される雑誌に掲載すること、シンポジウム終了後視察旅行を行うことなどが定められ、これは後の日中学術交流の雛型を神奈川大学と杭州大学とで創造したものとして大いに誇りとされるべきものである。そして、雛型ができたばかりの学術国際交流の中身の多様化と充実という点では、杭州大学の王勇氏とともに、日高先生の役割が極めて大きかったということを我々は銘記しておきたい。

さて、こうして始まった両校の交流の第一回のシンポジウムは杭州大学で開催された。丹羽常務理事、中島元学長、高野先生と共に参加された日高先生の報告は谷崎潤一郎と杭州の関わりについてのものであり、その際、「日本の作家は行き詰まりを感じると中国文化へ回帰しようとする。」という内容（言い回しがこのようであったかは不明）のことを言われ、筆者は強い衝撃を受けた。本学の『人文学研究所所報』23（1990.3）に掲載された『白蛇傳の解読』が学会で一定の評価を受けたこともあって、杭州と西

湖には強い関心を抱いていたのだが、それを生涯の研究対象とすることになったのは、日高先生、岡野先生、高野先生との「江南の春」を求めての旅行と、王勇氏との出会い、そして両大学の交流が根本にあり、日高先生の報告によって背中を強く押されたためだと筆者は考えている。

というわけで、この特集号に掲載する論文は、日高先生に敬意を表するために、私自身の研究者としての再出発のために、再度、明代末期、馮夢龍の編纂になる短篇小説集『警世通言』卷二八に収められた『白娘子永鎮雷峰塔』を取り上げ、其の中のいくつかの細かな問題について一文をものすることとした。作品名が長く、かつ日本人には馴染みのない名称があるので、前回に倣い『白蛇傳』とした。なお、文中に引用した原文、人名、地名は、全て旧字体で統一し、私自身の言葉による部分は常用漢字とした。また、中国のサイトからの引用は簡体字によった。

（一）把杭州作汴洲

『白蛇傳』の冒頭は以下のような詩で始まる。

山外青山樓外樓	西湖歌舞幾時休
暖風薰得遊人醉	直把杭州作汴洲

この詩の作者は南宋の林昇、温州の出身、字は雲遊又は夢屏という人物で、南宋の孝宗の時、年号で言えば淳熙年間（1163～1189）の文人であるが、生卒年は不明であり、この詩一篇で中国文化の歴史に名を残したと言える。まずはこの詩について少し説明をしておきたい。

1126年宋と金の対峙関係はついに破られた。翌1127年、戦争は金の一方的の勝利に終わり、首都汴京（現在の河南省開封市）は金の手に陥り、皇帝、上皇らは金に拉致され、残った皇族、貴族、官僚、軍人たちは南方へ落ち延びて、亡命政権を樹立した。これを靖康の変という。亡命政権の皇

帝高宗は現在の杭州を臨時の首都すなわち「臨安」とした。この時期、北方から杭州へ移住してきた難民は百万人にも達したと言われており、浙東の地に忽然と巨大な規模の消費都市が出現した。このため、膨大な人口の衣食住をまかなう必要があったわけだが、杭州の周辺は稻作地帯であり、しかも大運河を通じて蘇州から太湖、更には長江と結ばれ、錢塘江を通じて海に出ることが可能であったため、この需要に応えることができた。いや、蘇州や紹興に比べてはるかに後発の杭州に、飛躍的な発展の機会を与えたとする方が正しいであろう¹⁾。

さて、生活が落ち着いてみれば、杭州そしてその西にある西湖は白樂天と蘇東坡がこぞって絶賛した風光明媚の土地、人々は次第に亡命政権下の暮らしであることを忘れ、四季の風景の美しさを享受することに心を奪われるようになった。幸いにも金軍は水上や湿地帯での闘いを忌避し、長江を越えて攻めて来ることはないうえ、後には西方にモンゴルの巨大な帝国が出現し、金はその戦いに疲弊したため、南宋には一時の平和と安定、そして水運を通じての物資の豊富な供給によって繁栄が訪れた。街には至る所に料理屋や酒場が店を開き、湖上には一年中遊覧の船が往来し、「瓦市」と呼ばれた盛り場には常設の芝居小屋があり、さらにその周辺の広場や大道では演劇や芸能が演じられていた²⁾。こうした環境の中で、人々は北に攻め上り宋の首都と領土を回復することなど考えないようになっていったのである。この詩の一句目から三句目は、そうした様子を描写している。以下、説明文を加えながら訳してみよう。

西湖の回りには木々で覆われた美しい山々が連なり、西湖の東の街には、立派な高殿が軒を連ねて建てられている。

西湖に浮かぶ船の上で、西湖の周囲のあちこちで演じられている歌舞は、いつの季節でもいつの時刻でも已むことがない。

時あたかも春、暖かい風の爽やかな香りに誘われ、人々は散策し、

美酒に酔う。

この詩が選ばれた一つの理由は、季節が春であり、物語が清明節（春の彼岸に相当する）に始まることと符合していることにある。また、この三句によって、杭州の風景の美しさと南宋の首都としての繁栄、さらには「江南の春」の暖かな天気に誘われて歌舞音曲や野遊びを楽しむ人々の様子を短いフレーズで的確に示しており、主人公の許宣が清明節の墓参りに出かけるという物語の発端へ読者を誘うに相応しい詩であると考えられる。

しかしながら、この詩が文学史に残った理由はこの三句にはない。すなわち最後の句、「杭州を汴洲となす」というところにこの詩の主張があり、それがこの詩を文学史に名を留めさせたのである。ではその主張とは何か。

先に述べたように、杭州は臨時の首都、言い換えれば汴洲の代理の首都である。従って最後の句のフレーズを独立させて解釈すれば、「(人々)は国土の大半と首都を金に奪われながらも、杭州を汴洲であると思ってその苦しみに耐えている。」と読むことも可能である。しかし、このフレーズを前の三句とつなげて読めば、全く意味は異なる。杭州の美しさと繁栄、そして人々の春の享楽の情景を前提にして読めば、「(人々)は国土の大半と首都を金に奪われたことなどすっかり忘れ、杭州こそが首都（汴京）だと思って、享楽に耽っている」と述べているのだということは容易に理解できよう。つまり、この詩は、奪われた国土を奪回しようともしない南宋の大臣たち、そしてそんなことなど忘れて「江南の春」を楽しむ杭州の人々を厳しく謗った詩なのである。

温州の草深い田舎から杭州へ出てきた林昇は、科挙にも合格せず、彼の才能を認めるものなく、おそらくは失意のうちに故郷へ帰ることとなった。季節は春、清明の頃、湖や周囲の野辺や山に遊ぶ人々を見た林昇にとって、彼の才能を認めない杭州の要人たちと、国土の奪還に立ち上がることなく

享楽に耽る杭州の市民たちは、不愉快きわまりない存在であったろうと筆者は想像している。そうした自分の境遇と、南方に追いやられた分断国家の運命とを重ね合わせ、享楽に耽る人々を巧にかつ厳しく批判したところにこの詩の魅力がある。

この一句で文学史に名を残した林昇の詩は、多民族国家であり、少数民族による王朝支配が決してまれではなかった中国では、時代によって、受け取られ方には大きな違いがあったものと考えられる。つまり、この詩が創作され世に出た時点と、モンゴルに支配されていた元代、比較的平和であった明代、そしてこの詩が『警世通言』の一篇の冒頭におかれて世に出た明末とではそれぞれ異なる意味をもった詩として受け取られていたと考えられるのである。そこで、『警世通言』の出版された時期に、明朝がどのような状況にあったかを大ざっぱにたどってみる。

『警世通言』には天啓四年（1624）の序文があり、出版の時期がほぼ特定できる。それより少し前、萬曆四十四年（1616）年に、清朝の太祖となるヌルハチが「後金」太祖高皇帝を称し、年号を天命元年と定めている。これ以後、後金の南進しての攻勢が本格化した。萬曆四十八年（1620）には明の皇帝神宗万曆帝が死去、朱常洛が光宗として即位するがわずか一ヶ月で死去し、朱由校が熹宗として即位する。しかし、彼もその七年後には死去し、最後の皇帝となる崇禎帝が即位する。この間、1620年には後金が朝鮮を侵略し、1625年にはヌルハチが死去するも、ホンタイジが後を継いで旅順に入城し、瀋陽を都と定めている。まさに山海関と長城を間に、明朝と後金とが直接対峙するところまで切迫していたのである。

『警世通言』が出版されたその頃に、明朝の北方に危機が迫っていたこと、しかもその危機は、かつて中国の北半分を領土とした金の後継と称して「後金」と名乗る少数民族政権によってもたらされたものであった。さらに目を引くのが、天啓元年（1621）に杭州で二度の大火があったことで、

二万戸に近い家屋が焼失している。まさに、内外多難、しかも南宋時代の記憶を呼び覚ますような現実が進行する中で、この詩を冒頭に置く『白蛇傳』が『警世通言』の一篇として世に出た時、読者はこの詩の持つ意味を、単なる教訓としてではなく、より深刻に受け止めざるを得なかつたと思われる。なぜなら、南宋の繁栄は北方を金に支配されていたかりそめのものであつただけでなく、間もなく元朝によって滅ぼされ、特に江南の人々は圧政のもとに苦しむことになったからだ。

ここで改めて確認をしておかねばならないのは、『白蛇傳』を含む『警世通言』は馮夢龍の編纂によるものであつて、彼の創作であったわけではないということである。成化年間に刊行された『西湖遊覽志』及び続篇にあたる『西湖遊覽志餘』³⁾を見れば、『白蛇傳』の物語はその時点では、民間伝承として広がりを示していたのみならず、すでに芸能のテクストを通じて広く膾炙していたことが確認できる。

（雷峰塔は）吳越王の王妃がここに塔を建てたもので、初め千尺十三層で設計されたが、財政的に無理であったため七層とすることとなり、後に風水師の言により五階とすることとなった。俗に王妃塔と称した。……俗に湖中に白蛇、青魚の妖怪がいたが、塔の下に鎮められたと伝えられている。（田汝成『西湖遊覽志』第三卷「南山勝蹟」）

杭州では男女の瞽者の多くが琵琶を習い、古今の小説、平話を語つて、衣食に充てていた。この芸能を「陶（淘）眞」と呼んだ。おそらくは北宋の都汴京の遺風であろう。……紅蓮、柳翠、濟顛、雷峰塔、双魚扇墜などの物語は全て杭州でのことであつて、最近になって創られたものであろう。（田汝成『西湖遊覽志餘』第二十卷「熙朝樂事」、アンダーラインは引用者による。）

一方で、洪楩編の短編小説集、通称「清平山堂話本⁴⁾」に含まれる『西

湖三塔記⁵⁾』が物語内容において『白蛇傳』と共に通しながらも主題を異にすること、「清平山堂話本」編纂の時点で存在していたと思われる短篇小説のテクストが多数失われていることから、文字化されない芸能及び民間伝承のテクスト、或いは韻文による語りを反映した文字テクストとは別に、十六世紀の中頃には、『西湖三塔記』とは異なる『白蛇傳』の散文の文字テクストが成立していた可能性は十分にある。そして、その冒頭には林昇の詩が、杭州の美しさと繁栄、そして生活を楽しむ人々の生活を端的に描いた詩として、かつ「繁栄に溺れて南宋の轍を踏むべからず」という教訓が説かれたものとして置かれていたとしても不思議ではないし、もしそうであれば、この詩のインパクトはその時点ではさほど強烈なものではなかったと考えられる。そして、その詩が百年後に小説の冒頭に置かれた時には、およそ全く異なる意味を付与されて蘇ったということになり、言い換えれば、時代という大きなコンテクストの変化によって、読者が受容した意味内容には大きな変化が生じたということになる。

さらにもう一つの可能性、すなわち、この詩が『警世通言』において初めて『白蛇傳』冒頭に置かれたとすればどういうことが問題になるのか考えておかねばならない。そうであれば、少なくとも序文が書かれた時点では、明の北方の領土が侵されつつあり、しかもその勢力は自ら「後金」すなわち「金」の後継者を以て任じているため、この詩から、明がかつての南宋と同じ運命をたどるのではないかという危機感を読者に与え得るということを編者は承知の上で、この詩を冒頭においたのではないかと推測できるのだ。さらにその推測をもとに考えると、『警世通言』四十篇の中に杭州を舞台とするものが十六篇、すなわち四分の一もあること、南宋の英雄岳飛、及び杭州の聖地の一つである岳王廟（岳飛廟）に関わる物語が『警世通言』にも登場しないことに意味が生じてくる。筆者は、以前の論文で『白蛇傳』を政治的コンテクストで読むべきかもしれないということ

を指摘するにとどまっていたが、今ここでようやく一つの具体的手がかりを得た。しかし、これ以上のことは今明らかにし得ることではないため、今後の継続課題とし、小説の冒頭におかれた数百年以前の詩が、時代の激動の中で新たな意味を獲得することがあり得ることを結論として、この項を終える。

（二）樓外樓

次にこの詩に関係するのが、杭州市にある有名レストラン「樓外樓」である。この店のホームページによると、十九世紀の半ば頃に洪瑞堂という落魄した文人が、夫妻で漁をして生計を立てていたが、やがてその魚を材料に屋台店のような食堂を始めたのがスタートだという。やがて、材料の新鮮さと料理のうまさからお客様が増え始め、現在の場所、孤山の西に湖に面した店を建てるに至った。特に二代目以後の発展が著しかったらしい。まず、興味を引く問題はこの「樓外樓」という店の名前を誰がつけたのかということにある。落魄した文人であった初代の主人が自らつけたという説⁶⁾もあるようだが、それよりは今ひとつ説、すなわち、「樓外樓」の近くにあった「俞樓」の主人、清末を代表する文人俞樾（1821～1906）が命名したという方が面白い。俞樾はこの店の料理を愛していたため、主人の求めに応じて、かつ自らの「俞樓」と洪氏の店の軒が接していることから、林昇の詩句を借りて「樓外樓」と命名したというものである⁷⁾。

孤山の西の端にある俞樓とその前に建てられた屋台店から脱けだしたばかりのおそらくは小さな料理屋、それを南宋の繁栄に擬えて「樓外樓」と名付けたユーモアのセンスはなかなかのものだと思うが、俞樾が命名したのはおそらくは十九世紀後半、その時代に俞樾はどういう意図で林昇の詩を間接的に引用したのか、踏み込んで言えば、彼の脳裏に当時の状況と南

宋とを重ね合わせてみることがあったのか、考えてみる必要がある。仮に俞樾が命名したのではなかったとしても、十九世紀の後半から第二次大戦までの間に、この店に通う人々、特に文人たちはどういう思いでこの店の看板を目にし、その名前を口にし、耳にしていたのだろうか。分断国家どころか国家そのものの消滅の危機にあることを、この店の名前と、そこから引用される林昇の詩から人々は時に想起したのだろうか。だが、管見の限り、この店の名から類推される林昇の詩は専ら一句目と二句目であって、第四句「直に杭州を汴洲とする」に結びつけた近代以後の文章はあまり見当たらないように思える。

いずれにせよ、伝統の受容というのはそれほど単純なことではなく、時に新たな意味を付与され、時に一部が変形され、忘れ去られては再び思い出されるなど複雑な過程をたどる。南宋の殆ど無名の詩人による一篇の詩が、明末の国家が危機に瀕していた時期に偶然に或いは意図的に小説の冒頭に置かれ、更に近代の帝国主義侵略の真っ只中で料理屋の名として再生される、この過程から歴史と伝統、或いは伝統と近代ということを考えるきっかけが見つかるのではないかと筆者は考えている。

(三) 金華將軍廟

『白蛇傳』の冒頭におかれた林昇の詩の後は以下のように続く。

晋朝の咸和年間（326～331）、山から湖へ大水が流れ込み、西の城門から城内へと激流が襲った。その時忽然と水中から全身金色の牛が一頭現れた。後に水が引くと、その牛は北の山の方へ向かい、行き方知れずとなった。驚いた杭州の人々は、神様が姿を現したのだと思った。そこでお寺を建立し、名も金牛寺とした。西の城門とは今の湧金門のことと、そこには一つの廟があり、祀られているのは金華將軍で

ある。

「北の山」とは、保俶塔のある宝石山を含むあたりの小さな山々を指し、「金牛寺」はその山の東側に建てられたが、後に取り壊された。この牛の話は杭州にとって重要な物語であって、現在湧金門があったところに、故事に従い、池（「湧金池」と言う）が掘られ、そのなかには巨大な金色の牛の象が置かれている。

さて、しかし問題はその後、湧金門と湧金池の側に建てられた「金華將軍」廟で、この金華將軍とは一体誰なのかということである。以下のような面白い解釈がある。

杭州に金華將軍ありとされているが、多分これは「青蛙」が訛って「金華」となったのであろう。「青蛙」は極めて蛙に似るが、三本足である。夏から秋へと移り変わる頃に多く見られる。これが現れた家では高粱酒を一杯と豆腐一切れをお供えする。「青蛙」はその傍にじっと座っているだけで、飲まないのにその皮膚は青から黄色へさらには赤へと変わる。お祀りしたものは、「將軍様はお飲みになり酔われましたね。」と言って、湧金門外の金華太保廟にお届けする。すると、近頃行方の知れなくなったものが、その家で数日中に必ず見つかると言う。（清・阮葵生『茶餘客話』卷四）

北方方言を基礎とする現代漢語の共通語の発音では、金華は〈jinhua〉、「青蛙」は〈qingwa〉と大きく異なるが、杭州方言では〈-in〉と〈-ing〉の区別がほとんどないこと、また〈hua〉の〈h〉音が脱落してしまうため、この二つの語彙は、声調も含めて極めて近似した音と考えてよい。これに蛙の有するシンボリックな要素を加えると、この説はあながちデタラメとは言いがたい要素がある。

次に紹介する説は、金華將軍とは『水滸傳』に登場するもと海賊ならぬ河川の賊の棟梁張順だとするものである。そのもとは『水滸傳』（百二十回本）の百十六回に見える以下の部分である。

（宋江）は張順がこのように死してもその神通力顯らかなのを見て、杭州は湧金門外、西湖に面して廟を建立し、その廟に祀る際の名を「金華太保」とし、宋江自らが出かけていってこれを祀った。後に南方の方蠍を鎮圧した際に、宋江は都へ戻り、張順の功を上奏したところ、聖旨を賜り、勅命で号を金華將軍とし、杭州に祀ることになった。

こうした物語の影響を受けてかと思われるが、元代に編纂された『宋史』巻の四百五十では、襄陽の鬪いで勇壮な死を遂げた「民兵の将」張順を金華將軍としている。その経過を『宋史』では以下のように述べている。

数日が過ぎ、死体が川下から川上へと遡ってきた。甲冑に弓矢が刺さったまま浮かんでいる。見れば張順であった。体には至る所に槍や矢が刺さったままで、怒りを露わにした顔つきは生きているかのようであった。将兵ことごとく驚き、神だと思った。墓をつくり埋葬すると共に、廟を建てこれを祀った。

まず確認しておかねばならないのは、モデルとなった河川の賊は存在した可能性は否定できないものの、張順という名の著名な河川の賊は実在せず、物語の中のキャラクターだということである。そして、『水滸傳』では方蠍との戦い、『宋史』では金軍との戦いという違いはあるものの、死後にも張順の靈験顯らかなのを見て、神として祀ったという点では一致しており、物語から史実へ、そして物語が神を創るという流れがあったと考えられる。この流れが、『宋史』の記述を、また杭州の「金華將軍」廟に祀られているのは張順であるとする説を創りだしたのである。

さて、では史実から見た際には、この金華將軍とは誰なのであろうか。これについては、すでに『西湖遊覽志』に明確な答えがある。

金華將軍廟は湧金門の内側にある。その神は曹果といい、真定（現河北省正定）の人である。後唐（五代十国時代の南方に成立した地方政権）に仕え金華令となった。時に金華郡の兵が反乱を起こした時、曹果は計を用いてこれを平定した。吳越王はこの功を嘉し、婺州の長官とした。宋初、吳越王は（降伏し領地を返還するため）入朝する際に、曹果に国事を委ねた。そこで曹果は城内の三つの池を浚渫し、かつ湖水をその池に引き込み、船での往来の便を図った。吳越王は戻つてこの様子を見て喜び、池の側に「湧金」と刻した石碑を建てた。曹果が死ぬと土地の人々は廟を建ててこれを祀った。（『西湖遊覽志』第十六卷、南山文脈城内勝蹟）

曹果という人物は、河北省の出身だが、五代十国の時代に南方にやってきて、後唐と吳越に仕え、武将としてもまた文臣としてもその力量を發揮した。しかし、小国乱立の時代の中で彼が仕えたのはいずれも短命で消えていった南方の地方政権であったため、正史に名を留めることも、有名な文人の筆記に記録されることもなかった。そのため、張順や「青蛙」にその地位を奪われることになったのかと思われる。ではなぜ張順や「青蛙」は彼から將軍の地位を奪い取ることができたのか。言い換れば、この三人（蛙を含む）に共通する要素とは何か。

答えは頗る簡単である。全て水の神だということだ。杭州が水に取り囲まれた都市であり、当然ながら洪水という水の過剰に苦しみ、しかもその中には海水によるものもあったこと、またその一方で、西湖の貯水能力の低さ、周辺の河川から水が得にくいくことから水の欠如に苦しむ都市でもあることは、前掲の旧稿『白蛇傳の解説』で詳しく述べたことがあり、ここ

では繰り返さない。水の供給がいかに重要かは、杭州が稻作地帯にあること、極端な速さで人口増加を遂げた消費都市であることを考えれば、これも贅言を要しないであろう。従って、水をコントロールする神は極めて重要な神格であって、曹果が湖の水を市内に引き込み水運の便を図ったことは杭州市民から高く評価され、廟が建立されたのである。しかしながら、この人物が余りに知名度が低かったため、他の人物、或いは雨と結び付きやすい蛙という形象に置き換えられるということがあったということで理解できよう。

『白蛇傳』に戻る。冒頭の林昇の詩、そして今も人々に語り伝えられる牛の神の物語、それに次いで言及されるのがこの「金華將軍」廟である。この順番が読者に提供する意味は二つある。

一つは「金華將軍」廟が湧金門にあることから、白堤で出会った二人が一旦別れる場所としての湧金門を予め読者に暗示していると考えができる。林昇の詩の前半で物語の大きな設定＝江南の春を示し、そして保俶塔のある北山と湧金門を読者に示し、これから始まる物語にとって重要な場所が暗示されている。

二つはすでに述べたように、「金華將軍」とは水の神であり、金牛と並び示されることにより、この物語が水の神の物語であることが読者に伝えられているのだと考えられる。しかし、そのことは、曹果が極めて地方色の強い人物だけに、杭州を熟知している読者のみに理解できたであろうと思われる。そうした解読の容易でないコードを、蘇州の人である馮夢龍がここに組みこんだとは些か考えにくく、馮夢龍が編纂する以前にテクストは成立していた可能性が高いことを示している。

なお、林昇の詩の四句目に見える「杭州」は、分断国家の首都であることを示しているのであって、その言葉の意味内容は、中国全土に関わる政治的なものである。従って、どの時代に引用されようとも、——すでに述

べたように時代によって意味内容に大きな差違はあるが——、確実にその意味するところは読者に届けられるのであって、地方文化と関わりの深い「金華將軍」とはおよそ異なる。そのため、林昇の詩が馮夢龍によって加えられたのか否かを示す手がかりは、『白蛇傳』のテクストの内部にはないことを蛇足ながら付け加えておく。

(四) 地名による謎かけ或いは言葉遊び

本小論の最後の検討の対象は、一つの小さな地名である。白娘子と許宣が船上で自己紹介をしあった際に、白娘子の家が「箭橋の近く雙茶坊巷の入口」にあると聞かされる。ここで出てくる「雙茶坊」は、『西湖遊覽志』に二回出てくる。

一つは第十四巻「南山城内勝蹟」で、「清泰門を西に行くと……、熙春巷があり、宋代には雙茶坊があった。」と記されている。これに対し。第十七巻「南山分脈城内勝蹟」では、「玄真院、雙茶坊巷の中にある。」とあって、前者は街のやや東側にあり、後者は街の中心部にあったと思われるが詳細は不明である。もともと「雙茶坊」とは茶を喫する茶館が二つあったことから命名された俗称と考えられ、そうした地名は複数あり得た。また「～坊」とは坊条里制の名残の地名で、一定の面積を有するブロックを指すのに対して、「～巷」は通りとその通りに面した建物群を指すもので、この二つは区別されて使われていたと考えねばならない。ここで使われている「箭橋」、後で出てくる「秀王府」もいずれも宋代のもので、明代には存在しなかったものなので、「雙茶坊巷」も宋代の地名と考え、明代の地名で言えば清泰門から西へ行った「熙春巷」のことと解釈しておく。

さて、傘を貸したことをいい口実として、許宣は白娘子に会おうと、箭橋の雙茶坊巷の入口まで来るが、それらしい屋敷は見当たらず、尋ねても

分からぬ。そこへ召使いの青々がやってきて許宣を案内するが、語り手が「走不多路」と言つてゐるので、いくらかは歩いたことになる。そこは明確なランドマーク、すなわち孝宗皇帝の実父秀安僖王の屋敷、通称「秀王府」の向かいの家であった。その場所は、白娘子の説明にも、語り手の叙述にも出てこない「後洋街」というところにあったということが、南宋の杭州の繁栄ぶりを書き残した『夢梁錄』にある。ではその「後洋街」は明代ではどこになるかを『西湖遊覽志』で探してみる。

第二十卷「北山分脈城内勝蹟」によれば、杭州の城内一番北にある武林門から中へ入り、東へ向かい、中正橋を過ぎて南へ行くと觀橋に至る。そこから更に南に行くと衆安橋があり、その通りの西が保和坊、純禮坊、澄清坊で、この純禮坊（おそらくはそこに面しているかその中を通る街路）が「後洋街」なのである。前者の「雙茶坊口」は南山、後者の「後洋街」は北山と全く違う場所を指しているかのように思えるが、清泰門と武林門はそれほど距離が離れていないので、ほぼ同じ場所を示していると思われる。とりあえず以下のように考えておきたい。

- ①「後洋街」がおそらくは東西のやや大きな通りで「雙茶坊巷」はそこから南北に延びる横町であった。
- ②両者の交差するあたりに秀王府と白娘子の家があった。
- ③秀王府は小型の宮殿のような建物であったので、その側にある家は向かい側ということになる。

この後、許宣は白娘子から結婚の資金として銀塊をもらうが、それは国庫から盗まれたものであり、たちまち御用になる。裁きの場で取り調べを受けた許宣は、銀塊をもらった経過を正直に報告するが、役人は信用せず、「雙茶坊巷口」の屋敷へ検証に行くことになった。行ってみれば、そこには人の住んでいた気配はなく、近所の人も「後六年前に一家が病氣で死に絶えてから誰もおらず、時に幽靈が姿を見せるので誰も近づかない」とい

う。近づいてみると、門の横に階段があるがその階段の前にはゴミが置かれ、しかも竹が横に渡してある。捕り手の親玉である何立は部下に命じ、竹竿をどこかして中に突入するが、とたんに中から一陣の冷たい風とともに生臭い匂いが流れ出てきて一同をぞっとさせる⁸⁾。

ここで筆者が気になったのは、行く手を遮るために置かれたと思われる竹竿である。これは鬼神の世界と人間世界とを分ける、日本でいうところの結界にあたるものであるが、中国で竹竿を用いて結界を示す例を筆者は見たことがない。些か不思議に思っていたのだが、今回地名を調べていたところ、その答えらしきものがあっけなく見つかった。

先に引用した『西湖遊覽志』第二十卷には、純禮坊が「後洋街」であることとともに、俗称が「竹竿巷」であると記されているのである。そこから、こういう仮説が成立する。物語の語り手は、「雙茶坊巷」という地名のみを出して、「後洋街」の地名は出さず、「秀王府」というランドマークを示すことで読者へ解説のコードを送り届けた。しかし、それだけでは不親切と思ったのか、「後洋街」の俗称である竹竿巷を想起させるよう、屋敷に竹竿を置くという仕掛けをしたのではないかということである。この仮説に妥当性があったとしての話だが、次にはこんな仕掛けをしたのは誰かという疑問が浮かび上がる。聞き手と語り手が杭州の文化を深く広く共有していた杭州の語りものの世界の仕掛けがそのまま文字化されたのか、それとも筆者のように杭州文化に惚れ込んだ文人の悪戯か、いずれにせよ、この細やかな仕掛け⁹⁾の可能性の検討の先に、或いは小説テクストの特性を分析する鍵があるかもしれないと思えるが、それは今後の課題としたい。

注

1) 吳の中心蘇州、越の中心紹興に比べ、杭州の歴史は極めて新しい。紀元前後には現在の杭州の中心部は未だに干潟であったと考えられている。当初人間が住んでいたのは、西岸の丘陵地帯

のみであった。

- 2) 南宋の杭州の繁栄については、南宋末から元初に生きた周密の『武林舊事』、南宋の吳自牧『夢梁錄』などに詳しい記載がある。
- 3) ともに明代の文人官僚田汝成（1503～1557）の撰。田汝成字は叔禾、号して豫陽、杭州錢塘の人。『西湖遊覽志』、『西湖遊覽志餘』とともに嘉靖二十六年（1547）初刻。前者は杭州の地名について詳しく考証したもの、後者は杭州の史実、野史、物語に至るまで広く収集したものである。ともに、萬曆の重修があるが、萬曆後期の重修版本は後人の増修が少なくないうえ、広く普及した清末の嘉惠堂本がこれに基づいているため、注意が必要とされる。なお、この点については、1958 年中華書局から刊行された排印本の序文に詳しい説明と校勘がある。また、『四庫全書総目提要』では、この二つの著作に対して、「出典を明らかにしていないため、その真偽を明らかにできない。これは明人の通弊で、田汝成もこの俗を免れることができなかつた」とする点を除き、考証の確かさ、収集した内容の豊富さ、分類整理の見事さに高い評価を与えていた。従って、明代中期以前の杭州の歴史、地名についてはもっとも依拠すべき資料であると考えてよい。文中引用したテキストは全て中華書局排印本によった。
- 4) 洪楩が編纂した小説集には、当時の書目から見て、六十篇の短篇小説が収められていたと推測される。現存するものはその約半分にすぎないが、特に元代に語られていた物語の記録に見えるタイトルや梗概と一致するもの、三言に収められたものと重なるものが多いため、小説史上極めて重要な資料である。なお、洪邁の書房が「清平山堂」であることから、全体を勝する際の呼称として「清平山堂話本」と言わることが多いので、筆者は定義づけが十分にされていない「話本」という言葉を使うべきではないと考えてはいるが、ここでは通称に従う。
- 5) 前掲「清平山堂話本」所収の短篇小説。蛇の妖怪に若者が取り殺されそうになるのを真人（仙力を有する道士）によって助けられるという物語内容とともに、西湖湖中の島の傍に建てられた三つの石灯籠とい名物の由来を説明するという点で、『白蛇傳』と共に通する。ただし、物語内容は、唐宋传奇のそれに近く、妖怪には白娘子のような魅力的形象は与えられていない。また、妖怪に水神の要素もほとんど伺うことができないという点で、『白蛇傳』とは明白に物語り内容を異にするものである。
- 6) 以下は「樓外樓」のホームページの記載である。

楼外楼创建于公元 1848 年（清道光二十八年）。它的创始人叫洪瑞堂，是一位从绍兴来杭谋生的落第文人。他从南宋诗人林升的诗中取了三个字，把自己的小店取名为“楼外楼”。

最初的楼外楼“仅是一处平房”，是一片很不起眼的湖畔小店。但由于店主人善于经营，又烹制得一手以湖鲜为主的好菜，特别是他很重视与文人交往，使得在杭及来杭的文人雅士把来楼外楼小酌作为游湖时的首选。因此，生意日益兴隆，名声逐渐远播。

1926 年，已颇有财力的洪氏传人洪顺森对楼外楼作了翻造扩建，将一楼一底两层楼改建成有

屋顶平台的“三层洋楼”，内装电扇、电话，成为当时杭州颇有现代气息的酒家，使其生意更为兴隆。在这期间，光临过楼外楼的文化名人有章太炎、鲁迅、郁达夫、余绍宋、马寅初、竺可桢、曹聚仁、楼适夷、梁实秋等，以及蒋介石、陈立夫、孙科、张静江等政要。（<http://www.louwai.com.cn>）

- 7) 「百度一下」という中国の検索サイトで検索した記事に基く。同工異曲の話があちこちに見られるが、出典は明確ではない。ここでは、俞樾のような文人が命名者であったという一種の都市伝説があったと考えられていたことを示す資料としてあげる。

こうした名を命名する時、或いはこの名前の店に入る時、文人の脳裏に南宋と外国の植民地となりつつある現実とはダブらなかったのかということが筆者には気になる。なお、俞樾は日本漢詩のアンソロジー『東瀛詩選』を編纂した人物であり、かれの孫にあたる俞平伯は戦前戦後を通じて、『紅樓夢』研究の第一人者とされた。

另一种说法是因菜馆建在近代著名学者俞曲园（俞樾）先生俞楼前侧，洪瑞堂就到俞楼请先生命名，曲园先生说：“既然你的菜馆在我俞楼外侧，那就借用南宋林升‘山外青山楼外楼’的名句，叫做‘楼外楼’吧！”（「百度一下」、楼外楼）

- 8) 原文は以下の通りである。

何立等領了鈞旨、一陣做公的逕到雙茶坊巷口秀王府牆、對黑樓子前看時：門前四扇看階、中間兩扇大門、門外避藉陛、坡前卻是垃圾、一條竹子橫夾著。何立等見了這個模佯到都呆了。當時就叫捉了鄰人、上首是做花的丘大、下首是做皮匠的孫公。那孫公擺忙的吃他一驚、小腸氣發、跌倒在地。眾鄰舍都走來道：「這裡不曾有甚麼白娘子。這屋在五六年前有一個毛巡檢、合家時病死了。青天白日、常有鬼出來買東西、無人敢在裡頭住。幾日前、有個瘋子立在門前唱諾。」何立教眾人解下橫門竹竿、裡面冷清清地起一陣風、卷出一道腥氣來。

（『警世通言』卷二十八。テクストは蓬左文庫所蔵金陵兼善堂本の影印本（ゆまに書房、1985）によった。下線は引用者による）

- 9) 仕掛けはこの他にもあったと思われる。先に挙げた玄真院には旱魃になつても涸れぬ井戸があつたとされる。杭州の井戸などの水源には、杭州の都市の発展の歴史と関わる史実や、神々と関わる物語が伴うことが極めて多い。そうした史実と物語を背景にもつ水源や地名が、『白蛇傳』では意図的に使われていると筆者は考えており、そのことを次の論考で明らかにしたいと考えている。